

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

「忍者」研究の現状と課題

阿 刀 弘 史

1. はじめに

財団法人滋賀県文化財保護協会は、平成22年に設立40周年を迎えるにあたり、「琵琶湖が育てた歴史と文化」を共通テーマとして、展覧会など様々な記念事業を展開してきた。その中で私は主に、「甲賀忍者」と呼ばれる集団の紹介を担当した。これは、平成16年に滋賀県立安土城考古博物館第28回企画展で甲賀忍者を扱ったことがきっかけとなっている（滋賀県立安土城考古博物館2004）。

最初は、子供たちが面白がってくれるような話ができればいいだろう、程度に考えて取り組んだ「忍者」だったが、さまざまな文献にあたり、関係者各位にお話を伺ったり、講座を担当したりする中で、いろいろと感ずることがあった。そこで本稿では、私が把握しうる範囲での「忍者」研究の現状を概観し、研究を進める上での課題を明らかにして、今後の足がかりを作ってみたい。なお、大変失礼ながら以下では基本的に敬称を略させていただくものとする。

2. 研究史

忍者に関連するものとしては、甲賀については藤田和敏による「史料紹介 甲賀武拾壹家古士記録」（藤田2000）や郡中惣関連の論文（長谷川2002）が、伊賀については惣国一揆関連の論文（湯浅1993）などがある。しかし「忍者」を「忍者」として扱った論文的なものは、私が知る限りではほとんどが一般書籍であり、忍者や忍術を概説的に紹介したものや、娯楽性に重きを置いたものが混在している状況である。

その中でも初期の貴重な例としては、大正6年（1917）の高田俊一郎『忍術魔法秘伝』、大正8年（1919）の伊藤銀月『忍術の極意』、昭和3年（1928）の藤田西湖『法術行方絵解』、昭和9年（1934）の武道研究所編『伊賀流甲賀流忍術の極意』などが挙げられる。特に戦前においては伊藤銀月の著作が目立つ。伊藤銀月は明治から昭和初期にかけて活動した小説家・評論家で、反近代の思想を根幹においた作品を多く著した。戦前から戦後にかけての時期では、藤田西湖もいくつかの著作を残している。藤田は甲賀流忍術を受け継いだ甲賀流忍術第14世、「最後の忍者」を自称した武術家である。第二次世界大戦中においては、陸軍中野学校で自らが伝承する武術を指導し、戦後も指導者として活躍した。「最後の忍者」を自称する者はこれ以後も現れているが、自らの有する特殊技能をもって為政者に仕えた、という点では、確かに「最後の忍者」といえる人物かもしれない。

その後、昭和30年代から現在に至るまで、小説における山田風太郎ブーム、漫画における白戸三平ブーム、ドラマ

『影の軍団』のヒット、TVゲームにおける「忍者」キャラクターの定着など、メディアの世界では常に「忍者」が存在し続けており、これと同調して奥瀬平七郎（忍者全般・伊賀流忍術）、名和弓雄（忍術・忍器全般）、戸部新十郎（忍者全般）、柚木俊一郎（甲賀流忍術）、初見良昭（戸隠流忍術）、黒井宏光（伊賀流忍術）、池田裕（伊賀忍者）、川上仁一（忍術全般）らが精力的に著作を発表している。いずれもそれぞれの研究成果をもとにした力作なのだが、出版の体裁が一般向け書籍であるために概説的なものになることが多く、またエンターテインメント的要素も前面に押し出されているため、学術論文としては扱いにくい。

そんな中、近年では、尼子騷兵衛の『忍たま乱太郎』がアニメ化されてヒットしており、低年齢層における忍者イメージはほぼここで形成されているといえる。尼子騷兵衛は研究者でもあり、作品内で描かれる忍術の描写などはその研究成果や思想が反映された興味深いもので、漫画やアニメといったわかりやすい形で子供たちに伝えている。現在一番影響力のある研究成果といえるであろう。

また、海外の研究者も存在する。彼らの著作は、どちらかといえば古武術的な側面に注目したもののようである。

3. 「忍者」研究の現状と課題

このように、「忍者」というテーマは爆発的なブームにこそならないものの、関連書籍は毎年出版され、映画も2～3年に1本は公開されている。各地の忍術屋敷や博物館も、コンスタントに入場者があり、忍者体験イベントには多くの参加者が集う。興味を持つ人が多くいて、歴史の側面として認識されているにもかかわらず、今も個別のテーマを掘り下げた研究が表に出てきていない。これがすなわち、「忍者」研究の現状である。

そこで、ここでは想定しうる個別の研究テーマをいくつか挙げて、それらについて現時点でどのような研究がなされているかを見てみたい。

（1）忍者のルーツ

ルーツに関しては、ほとんどの忍者関係書籍において、それなりのページ数を割いて紹介されている。おおよその論調は同じで、聖徳太子が使った大伴細人（『忍術應義傳』）、日本書紀推古天皇九年条における新羅の間諜の記述などから語られるが、いずれにせよ後世の組織的・体系的に完成された忍者集団とはほど遠いものであること、戦乱の世の中では諜報集団が存在するのは当然で、社会の要請として成立したものであり、具体的に論じうるものではない、という内容である。戸部新十郎は著作の中で、「忍者の

発生や展開は、素っ気ない実態とロマンの間を往来して、辿らねばならないだろう。」と記述している（戸部1995）。すなわち、忍者と呼びうる集団が成立するのは人間、特に有力者の陰の部分が原因であること、ゆえにその始まりを確定することは困難であること、超人的な能力と目される部分は鍛錬によるものであること、などの現実的な解釈と、そこに無意識に超人性やロマンを求めてしまうわれわれの心理との間で折り合いをつけながら、少しずつ解明していくしかない、ということであろう。

（2）各地における諜報集団の歴史と実態比較

各地の諜報集団史や実態の解明は、それぞれの地域の研究者が精力的に行っている。また、川上仁一が全国の忍者分布図を発表しており、各地の忍者集団の名称や簡単な特徴の比較は、一目でできるようになっている（川上2009他）。しかし、現状ではいずれの地域の研究も、頭打ちになりつつある印象をうける。これは忍者集団の特質上仕方のないことだが、研究の基礎となる文献資料が非常に少ないためである。だが、これ以上の進展が望めないのか、というと、どうもそうとも言えないらしい。甲賀の地元の研究者の方に伺うと、甲賀二十一家や五十三家の末裔にあたる家には、今も忍者働きの実態を示すような資料が残されているという。ただ、末裔の方々から自らを「甲賀忍者」ではなく「甲賀古士」と称していることからわかるように、自らを「忍者」と認めることには複雑な感情が伴う。よって、現状では伝来する資料を拝見することはできても、それを表に出したり、それをういた研究を行ったりすることができない場合が大半であるらしい。ただ、これは世代交代が進めばまた状況が変化することもありうる。よって、むしろ民俗学的手法を用いて資料の調査・収集にあたり、その記憶や成果を風化させずに記録に留めておくことが大切になる。

（3）忍者集団の形成と雇用者との関係

忍者集団の形成と雇用者との関係については、戸部新十郎の定義が明快である（戸部1995）。忍者の定義は「（中略）その技術が〈職能〉にまで高められ、彼ら一族一党が、〈職能集団〉として形づくられるところにある」とし、忍者と雇用者との関係については「命令者はその実行を命じ、受けた者は目的意識を明確にして果たす。それが忍者行動である」としている。そして、命令者（＝雇用者）の命令が無い場合の忍術の使用はただの偷盗であり、そういう集団は忍者ではなく盗賊であるとする。確かに、多くの忍者集団がこの定義に当てはまる。ただ、忍者集団の中で最大派閥の一つである甲賀については、その主な雇用者であった六角氏との関係が、必ずしもこの定義に当てはまらない。そのあり方の違いを含め、検証を深めていく必要があろう。

（4）鈎の陣

長享元年（1487）、いわゆる「甲賀忍者」の存在を世間に知らしめた事件として著名である。『淡海温故録』『後太平記』『実隆公記』などに記述があり、かなり細かい推移まで判明している。『淡海温故録』の記述が有名だが、この地誌には著者など不明な点があり、資料としてはまだ検証していかなければならない部分が多い。甲賀武士たちの忍び働きについて、地元で伝承する資料を探していく努力が必要である。

（5）甲賀破儀

天正13年（1585）の紀州雑賀攻めに際して起きた、甲賀武士団解体の直接の原因となった事件で、これも主に豊臣秀吉側からの記録（『太田水責記』など）があり、比較的細部までわかっている。ただし、帰農した甲賀武士たちのその後の変遷については明らかでない部分が多く、これもやはり資料探索が今後の重要な鍵となろう。

（6）天正伊賀の乱

織田信雄（第一次・1579）・信長（第二次・1581）による伊賀攻めで、特に第二次については比叡山焼き討ちに比する殲滅戦だったともいわれている。『多聞院日記』『伊乱記』『信長公記』などに記述があり、これもかなり詳細が判明している。特に『伊乱記』はこの乱全体についてのまとまった記録であり、基本資料となっている。もっとも、日付など細かな部分では『信長公記』などの記述と一致しない部分もあり、何よりも舞台となった伊賀で、この時期の良好な資料が見いだされていない。今後も検証は必要である。

（7）神君伊賀越え

天正10年（1582）、本能寺の変を知った徳川家康が、堺から三河まで明智勢の手を逃れるため脱出を図った事件で、家康最大の危機であり、江戸幕府に伊賀忍者が取り立てられたきっかけともいわれる。『伊賀者大由緒書』『東照宮実紀』『徳川実紀』などに記録が見られるが、史料によって所用日数もルートも異なっており、いまだ不明な部分も多い。なにより、第二次天正伊賀の乱はこの前年、天正9年（1581）のことであり、信長によって焦土と化した伊賀の人々が、反信長を掲げた明智に与して家康を討つ可能性は高かった。いくら近道で、かつ見つかりにくい山中とはいえ、普通なら伊賀を通るルートは選ばないだろう。そこをあえて選ばせたのは、家康の家臣に伊賀の服部半蔵がいたこと、甲賀衆が協力したことが理由として考えられている。『徳川実紀』では、伊賀盆地の平野部を通過した記述が見られるが、これについては遠回りになる上、追っ手に見つかる可能性も高いため、間違いではないかとの見解がある。今のところ、伊賀や甲賀の地元に残る史料などか

ら、甲賀から北伊賀を抜けるルートを選択し、伊賀の中央部は通っていない可能性が高いとの指摘がある（池田2009他）。

また、『伊賀者大由緒書』では服部半蔵がいたゆえに伊賀者が集結、護衛にあたり、これに恩義を感じた家康が伊賀者を取り立て、半蔵をその頭に据えたとの記述がある。しかし『寛政譜』では、家康に命令をうけて先導した、と簡単に記述されており、史料によっては本多忠勝の勧めでしぶしぶ先導したかのような記述も見られる（『三河後風土記』）。ルート、伊賀者のその後についての意義など、様々な問題をはらむテーマである。

（8）忍術秘伝書

各地・各流派に伝わる忍術秘伝書の題名や概略などは、熱心な研究者によって一覧化され、インターネットで公開されている。古くは16世紀中頃のものなども紹介されているが、多くは18～19世紀に成立したものらしい。解説については、それぞれどの程度までなされているのか不明だが、三大忍術秘伝書といわれる『萬川集海』『忍秘傳』『正忍記』は原本が複製・復刻されており、目にすることができる。また、『萬川集海』の一部と『正忍記』は、現代語訳も出版されている（名和1975他）。これらの解説は、それぞれの研究者たちの努力の賜物であり、大いに評価すべきものである。ただ、精度を高めるための研究者相互のクロスチェックがなされていないのが現状である。

（9）忍術

忍者の忍者たるゆえんはまさに忍術にあるといえる。しかし一般に抱かれている派手なイメージは、芝居や立川文庫、映画などの影響によるものであり、さすがにこういった荒唐無稽な部分を真剣に取り上げることはあまりない。むしろかつては武術の一つとして研究されていたような側面もあったが、現在では池田裕、柚木俊一郎、黒井宏光、川上仁一らが、忍術秘伝書の研究をもとに実際に自分で鍛錬・実践することで検証を加え、実行可能な範囲の解釈を発表している（池田2009他）。しかし、戸部新十郎の定義がもっとも忍術の本質を表しているように思える。曰く「（中略）忍術はいつ、だれが創始したというほどのものではない。人間社会の発生とともに起こる暗い部分の実行にあり、それがさまざまに工夫され、理屈が加えられ、一つの術技らしいものになったにすぎないからである」（戸部1995）。すなわち忍術はヒーローの必殺技でもなんでもなく、諜報・暗殺などの陰の任務実行のための技術でしかない、ということであり、これを念頭において必要以上に美化することなく検証すべきものなのである。そして実際に、それほど特殊かつ過酷な鍛錬を経ずとも忍術を使うことができる、ということは、映画『梟の城』などで証明されている。忍術も、前述のように「素っ気ない実態とロマ

ンの間を往来して」検証を進めていくべきものなのだろう。

（10）忍器

忍器も忍術と同様で、忍術秘伝書の解説を元にして復元・実験が行われている。そして、これもまた芝居や映画の影響で、リアリティのないイメージが流布してしまっており、それに対して忍術の項目で挙げたような研究者たちが、それぞれに検証を加えて成果を発表している（池田2009他）。

しかし、忍器研究の最大の問題は、これが口承やテクニックではなく「物」を対象とするものであるにも関わらず、その実物が現存していないことにある。問題とする時代に実際に存在していた物がまったく無い状態で、その物を検証している、という状況に違和感を覚える。研究者たちがこれまで探し続けてきて、いまだ確実に使用された、と言い切れる忍器を発見できていない、という状況は、研究を進める上での大きな障害である。極論すれば、これまでの検証・研究が水泡に帰す可能性もある。非常に困難かもしれないが、実物の発見を期待したい。

4. 「忍者」研究の今後

「忍者」の学術的研究は、最初から他のテーマよりもハードルが高いといえる。それは、誰もが「忍者」という言葉から喚起される共通イメージを持っており、かつそのイメージが現実離れしている、ということが原因である。黒装束で背中に刀を背負い、屋根を走り手裏剣を投げるキャラクターを見た場合、少なくとも八割以上の日本人はそれが「忍者」であると認識するだろうし、逆もまたしかり。さらに、「忍者」という言葉が喚起するイメージは、超人的な能力を持ったヒーロー、という面も併せ持っている。そして人々は、そういった超人的な能力は、実際にはありえない、ということを知っている。このように、確立されたイメージと、それが非現実的だとする理性とが人々の中にあるために、真剣に「忍者」を論じることが非常に難しくなっているのである。まじめに扱おうとしても、ゲームや漫画のキャラクターを論じているかのような色眼鏡で見られることが多くなるため、他のテーマ以上にシビアな姿勢で臨むことが必要となる。

そもそも、「忍者」と一括して扱うこと自体にも無理がある。有力者に仕える諜報集団を指すものとして、「忍者」という言葉は文献にはほとんど現れておらず、乱破・透破など各地域での呼び名が見られる。甲賀・伊賀を例に挙げるまでも無く、こういった集団の成立や性格には地理的な特性の影響も大きいであろうから、まずは地域や大名ごとに該当する集団を取り上げ、一つずつ論じていくことが必要になると思われる。

今後の研究発展のためには、文献史学だけではなく、考古学・民俗学などの手法も取り入れ、さらに研究者同士の

横の連携も必要になるだろう。しかし、これもなかなか難しいものらしい。甲賀忍術村忍術博物館で担当者と話をした際に「横の連携が必要では」と提案したところ、すでにかつてインターネット上で「忍者研究ネットワーク」を立ち上げたことがある、と教えていただいた。これによって、各地の在野の研究者と研究成果の情報交換を図ろうとしたものであったが、結果的には失敗に終わったという。「忍者」に興味がある、という人々が大量につめかけ、漫画や小説で得た知識が事実なのか、という質問で埋め尽くされ、情報を一方的に引き出されるだけになってしまったらしい。しかも、質問者の思い入れや思いこみに反するような回答をすると不興を買い、まともな運営が不可能になってしまった。敷居が低く間口が広いテーマゆえ、こういった問題が簡単に生じる。かといって、学会として在野の研究者と切り離すことは、今後の資料調査のためにはむしろ悪影響があらう。伊賀には忍者研究会が存在しており、地道に研究会を開催したり調査を実施したりされているようなので、こういった動きと関わりながら、徐々にそれぞれの課題を深めて、「忍者」研究の立場を確立していくことが必要なのだろう。

5. おわりに

以上、今年「甲賀忍者」を考える機会を与えていただいた中で感じたこと、知ったことを中心に、自分の把握している範囲での現状と課題をまとめてみた。「忍者」は、子供から大人まで、多くの人が興味を持って見てくれるテーマである。しかしそこには、いまだ明らかになっていない歴史の闇が横たわり、フィクションと現実が混在している。そして研究者たちは、それぞれに真実を解明したいと努力を続けている。しかし、真剣に取り組んで解明されるリアルな真実と、一般的に抱かれているエンターテインメントなイメージとの落差に、研究者、忍者ファン双方が、それぞれに対して失望を抱きかねない状況にある。私としては、その溝を埋めつつ、「忍者」研究が歴史研究の一ジャンルとして成立すれば、との思いを抱いている。そういう意味で、昨年財団法人滋賀県文化財保護協会が発行したシリーズ近江の文化財001『甲賀郡中惣の世界』において、甲賀武士団の話をもとめて紹介する機会を得たのは僥倖であった。また、甲賀市でも現在制作中の『甲賀市史』において、甲賀忍者に紙幅を割くという。こういった、従来娯楽的な内容と無縁であった場所で、真剣に「忍者」を論じる機会が増えることで、研究のあり方が変わってくればよいと思う。

私などはこのジャンルではごく新参者に過ぎず、何十年もかけて、文字通り体を張って真剣に取り組んでおられる諸先輩方には深い尊敬の念を抱いている。かつて「全国版忍者分布図」の図録への転載をご快諾いただいたうえ、

せつかくだからと修正を加えた最新版を提供して下さった川上仁一氏、忍器に関する記述やイラストの使用をご快諾くださった尼子騷兵衛氏と堀口順一朗氏、そういった方々への連絡などを快く受けおっていただいた学習研究社歴史群像シリーズ編集部の皆様、甲賀市指定文化財である大原家版『萬川集海』を快く展示させて下さった大原家の皆様、そして忍者に関して全く素人の私に多大なご協力・ご教示をいただいた甲賀忍術村村長の柚木俊一郎氏と同忍術博物館の北澤晃氏らには、記して謝辞とさせていただきます。そういった方々にご教示やご理解をいただいて、今年度は忍者の話を県民の皆様の前ですることができた。私の付け焼き刃の考えが、末裔の方々や研究者の方々の失礼に当たらなければよいが、と願うばかりである。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 池田 裕 (2009) 『忍者軍団』【決定版 忍者・忍術・忍器大全】学習研究社
- 池田 裕・黒井宏光・柚木俊一郎・三間冬馬・川上仁一 (2009) 『忍術』【決定版 忍者・忍術・忍器大全】学習研究社
- 石田善人・柚木俊一郎訳 (1981) 『万川集海 陽忍篇』誠秀堂
- 学習研究社 (2003) 『忍者と忍術 闇に潜んだ異能者の虚と実』(歴史群像シリーズ71)
- 学習研究社 (2007) 『決定版 図説・忍者と忍術 忍器・奥義・秘伝集』(歴史群像シリーズ特別編集)
- 川上仁一 (2009) 「全国版 忍者分布図」【決定版 忍者・忍術・忍器大全】学習研究社
- 滋賀県立安土城考古博物館 (2004) 『影の戦士たち—甲賀忍者の実像に迫る—』(第28回企画展 親子で楽しむ考古学4)
- 新人物往来社 (1999) 『戦国風雲 忍びの里』(別冊歴史読本第24巻第34号 No.529)
- 新人物往来社 (2004) 『特集 忍びの戦国誌』(歴史読本2004年8月号)
- 藤一水子正武 (中島篤巳 解説) (1996) 『忍術伝書 正忍記』新人物往来社
- 戸部新十郎 (1995) 『忍者—戦国影の軍団』P H P 研究所
- 名和弓雄訳 (1975) 『万川集海 忍器篇』誠秀堂
- 長谷川裕子 (2002) 「戦国期における土豪同名中の成立過程とその機能—近江国甲賀郡を事例に」『歴史評論』624
- 長谷川裕子 (2002) 「戦国期における紛争裁定と惣国一揆—甲賀郡中惣を事例に一」『日本史研究』482
- 藤田和敏 (2000) 「史料紹介 甲賀式拾遺家古土記録」『洛北史学』(2)
- 藤本正行訳 (1976) 『万川集海 陰忍篇』誠秀堂
- 湯浅治久 (1993) 「「惣国一揆」と「侍」身分論—在地領主・村落研究の接点を求めて」『歴史評論』523

(あとう こうじ：企画調査課 主任)

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage